

平成25年度第2回（通算第48回）ソフィア発見講座(報告)

実施日 平成25年11月13日（水）18:00～19:20
会場 磐周教育研究所 大会議室

テーマ 「日本全国 岬めぐりと山めぐり」

講師 木野 弘之 先生（豊田東小校長）

本年度第2回のソフィア発見講座の講師は木野弘之先生にお願いしました。今回は教育の話とは多少離れて岬や山の話が中心となりました。木野先生にとっても教育と離れた話題でまとまった話をされるのは初めてだったようです。

全国の岬や山に話が及び、プロジェクターから映し出される風景をとおして参会者は居ながらにして日本全国を旅しているような気持ちになりました。

（参加者 46名）

1 はじめの言葉



司会 小澤一則 教頭（袋井西小）

今回のはじめの言葉や司会は、活動推進委員の袋井西小小澤教頭先生でした。「・・・今日はほっとした時間が過ぎせるのではないかと思います。」という言葉で会が始まりました。

2 主催者挨拶並びに講師紹介

活動推進委員会副委員長 山田幸久校長（山名小）

第2回のソフィア発見講座運営の中心となったのは、活動推進委員会副委員長の山名小山田校長先生です。

山田先生は一緒に務めた経験から、まず、木野先生が書いた学校便りには人の心を和ませる文学的な文章や教育問題を鋭く切る文章が多く、保護者のファンが多かったことを紹介しました。次に、ライフワークから見て現代の伊能忠敬ではないかと続け、本日は人生を見つめた「ためになる話」が期待できると紹介を結ばれました。



3 木野先生のお話し



◎ はじめに・・・学力向上・保護者対応等の忙しい中、こんな気楽な話をしているのか悩みましたが、「頼まれた仕事は受ける。」というのが信条なので今日はお話しをさせていただきます。

私は社会科の地理が専門。日本地図の隅っこに書かれているのが「岬」、茶色く濃く描かれているのが「山頂」。その岬と山に興味を持ちました。自転車で日本一周を目指

しましたが、それが結局岬めぐりとなりました。

◎ 岬とは、人にとって何か・・・

三浦半島・・・昔流行った「岬めぐり」の歌の舞台は内容から考え三浦半島ではないか。

「岬めぐり」は失恋の歌だがなぜか人を元気にさせる。

三浦半島は「観音崎」。しかし、「観音埼灯台」という。岬を陸から見たときは(国土地理院の地図などは)「やまへん」。海から見たとき(海上保安庁所管の灯台名など)は「つちへん」。岬は領土を守るという意味がある。

室戸岬にて・・・日本中の道は合流し、東となって岬に向かう。

竜飛岬にて・・・失恋の歌は北の外れでなくてはならない。敗北感がある。北の岬は心を癒す。各岬には自転車で行った。行った当時高速道路はなく情報化社会でもなかった。岬に個性があった。人を励ます風景が岬にはある。

佐田岬(佐多岬ではない)：四国最西端。行きやすい岬。近くに小学校があったが閉校していた。どこの岬の周辺も児童数が激減している。

鮎が崎(とどがさき)：岩手県宮古市。本州最東端の岬。「喜びも悲しみも幾年月」の舞台となったところ。着くまでに歩いて一時間かかるが思ったより人がいる。岬は隅っこだが、隅っこ大好き人間はどこにもいるものだ。隅っこには中心にない安心感がある。人は疲れたときに隅っこを求める。

経ヶ崎：丹後半島。よそから来た人にも親切だった。自然が厳しいので助け合う。

佐多岬：鹿児島県。本土最南端。広がる青い海、果てしなく明るく広い海。南国の植物が生えている。思い出を作ってくれる場所。

波戸岬：玄界灘に突き出た岬。朝鮮半島への近道。秀吉が朝鮮を攻めたときの基地となった名護屋城の石垣があった。岬は外の世界への出口。

尻屋崎：下北半島。下北半島には大間崎と尻屋崎がある。寒立馬(かんだちめ)がいることで心が温まる。



都井岬：宮崎県。ここにも野生馬(岬馬)がいる。岬には牧草地(牧場)が多い。風が強いので他の作物は作りにくいのだろう。牧草地以外の利用は・・・原産。

岬には風力発電も多い。1位北海道の日本海側、2位青森県、3位鹿児島県、4位静岡県。

地球岬：室蘭市。東日本の岬。ここに行くと海が丸く見える。なお、土地土地で海・空・道にそれぞれ色がある。沖縄の道は珊瑚の薄っぼい灰色。南九州は火山灰の赤っぼい色。

宗谷岬：岬めぐりの人の最終目的地になることが多い。サロベツ原野からの利尻山夕景はすばらしかった。同じ景色は二度と見られなかった。

岬には自転車で行ったと言ったが、自転車は分解して電車で行き、近くで組み立てた。当時は時刻表の世界。計画作りが楽しかった。自転車は大体時速20キロ。一日約120キロ。日本一周は結局10年以上かかった。しかし、効率性から解放されるということは日常から解放されるということ。

◎ 山めぐり

日本百名山には岬めぐりで里から見ていた山々がのっていた。

利尻山：北海道。ここは登ることよりも、登山口まで行くことが大変だった。宮浦岳(屋久島)も同じで、取り付くまでが大変。

岩木山：青森県。リンゴ畑の彼方に見えていた。作業をやっていたおばちゃんがリンゴ

を一つくれた。街のシンボルとなっている。

開聞岳(鹿児島)：菜の花畑の向こうに見えた。見ていると自然に励まされる。力を与えられる。山がその土地の風景の一部となっている。百名山は、地方の知られていない山が入っているところがいい。里の暮らしと山のつながりを大切にしている。

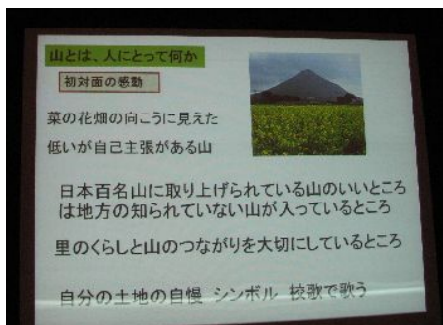
穂高連峰：自然を満喫できる山々である。スポーツ登山の対象。

地方の山(東北 九州)：その土地独特の風土を楽しめる。どうしても愛さなくてはいけないような美しさがある。風景の美しさを山が演出している。

羅臼岳：北海道知床。どうしても北方領土を山の上から見たかった。しかし、遠かった。熊が怖かった。

岩手山にて・・・苦労して登ったのに視界ゼロだった。計画書を作っても計画通りには行かない。そこで頭と体を使う。登ると達成感がある。

槍ヶ岳にて・・・空が見える開放感がいい。山に登ると足下には毎日暮らしている街が見え、悩んでいることがちっぽけに思える。空がいやなことを流星のように流してくれる。便利と安らぎは別だと思う。自然に溶け込むことによって思考は自由になる。



- ・ 登山は、目標に向かっていくことの楽しさを感じる。
- ・ 人間にとって、足は「第二の心臓」
- ・ 山道とは、俗世間から離れ、自分を見つめる道
- ・ 山は自分の心を素直にしてくれる。
- ・ 私たちは故郷を思うとき、とかく山の風景を思い出す。見守ってくれる山がある。
- ・ 山があると街を情緒的にする。

八ヶ岳：カラマツで季節を感じる山。さびしいのがカラマツの魅力。

目標があって生きてるととても楽しい。あきらめないで自分の弱さに向き合うこと。あなたのエベレストを見つけてほしい。

(質疑応答)

- 一番好きな山は？ 笈ヶ岳(石川・岐阜・福井県境)、高塚山(春野)、大札山(川根)。
- 家族はどう思っている？ 子どもを背負って登ったこともあった。
- 最後に登った山は？ 白馬岳(百名山)、高塚山(三百名山)。

4 お礼の言葉

活動推進委員会顧問 中澤哲也 校長(磐田北小)



今日は得をした気分。このわずかな時間に様々な岬をめぐって山を登ることができた。

非日常、こだわり、心の線。一步引いて自分の生活を見たとき、あるいは職を取り除いて見たときに何が残るのだろうか。危機感を感じた。

狭い世界の中で暮らしていて、かたくなな考え方になりがちで、脱却することが大切。先生の独特な感覚は経験に裏付けされている。